文部省の目標の十倍も覚える

昭和 36 年の 3 月、朝日新聞の学芸欄に、大岡昇平氏が、「入学後、二か月で百字……漢字をばりばり読む小学生」という見出しで、わたしの学級を全国に紹介してくださいました。このことから、「石井漢字教室」とか、「石井方式」ということばが、いっぺんに世間に広まりました。

文部省の学習指導要領には、一年生が一年間に学ぶ漢字は 46 字、そのうち 30 字ぐらい覚えられればよい、と書いてあります。

ところが、わたしの学級の一年生は、入学して二か月で、100 字の漢字を覚えたのです。そして、一年生を終えるまでには、文部省の目標の十倍、300 字の漢字を覚えてしまったのです。

一流作家を感動させた一年生

大岡氏が、わたしの授業を見にこられたのは、三学期の 2 月でしたから、わたしの学級の一年生は、事実、300 字ぐらいの漢字を、覚えていたと思います。このときも、五、六年生でも習わない漢字がたくさん使ってあって、とてもすらすらとは読めないような文章を、いきなり子どもたちに読ませました。ところが、わたしの学級の一年生は、大岡氏たちの見守るなかで、これをばりばりと読んで見せたのです。大岡氏は、このときのようすを、「それはまったく感動的な光景であった」と、書いておられます。

ではつぎに、そのとき、一年生の読んだ文章をお目にかけましょう。

一年生がこんな文章をばりばり読む

「竹男さん、肉屋さんへ行ってね」

と、台所からお母さんが言いました。竹男さんは、「はい」と、返事をしました。けれども、本から目を離しません。

「鳥のひき肉を五十円、買って来て頂戴」

竹男さんは、やっと立ち上がりました。そして、お母さんから渡された百円札を、ポケットに入れると、買物袋を持って、急いで出かけて

行きました。米屋さんの前で、進さんに呼び止められました。

「竹男さん、どこへ行くの」

「肉屋さんへお使いに」

「何だ、お使いか。走っているから、僕はどうしたのかと思ったよ」

「だって、早く帰って、読みかけの本の続きを読みたいんだもの。さようなら」

竹男さんは、また駆け出して行きました。

肉屋さんの店先には、ハムやソーセージや卵が並んでいました。

「おじさん、五十円下さい」

竹男さんは元気に言いました。

「はい、はい。五十円、何を上げましょうか」

「ええと、何を買うんだっけ。ええと、牛肉ではないし、ハムだったかな。何だ、たかなあ」

いくら考えても思い出せません。竹男さんは、気まりが悪くなりました。

「家へ帰って、もう一度聞いて来ます」

竹男さんは、あわてて家へ駆けもどりました。

小学一年生に中学生の漢字力

この文は、小学校の二年生の教科書にある文です。でも、その本では、●じるしのついている漢字だけが使われていて、その他の漢字は、全部ひらがなで書かれています。また、〇じるしのついている漢字は、中学、または高校になってから学ぶ漢字です。

このように、中学生でも習わない漢字を多く使った、五、六年生でも読めない文章を、わたしの学級の一年生は、ばりばりと読みます。この程度に漢字を使った文章なら、いきなり読ませても、中以上の子どもなら、平気ですらすらと読みます。事実、大岡氏にお見せした授業は、参観者が教室に来られてから、

「きょうは、この勉強をしましょう」

といって、この文章を子どもたちに配り、下読みさせないで、いきなり名ざしして読ませたものです。

では、石井学級の一年生は、どのようにして、一年間に、このような文章が読めるようになったのでしょうか。